



豊富な実証例から
計量経済学の
「生きた」知識を身につける!

東洋経済新報社

第3章 最小2乗推定量の統計的性質

藪友良

『入門 実践する計量経済学』

(東洋経済新報社)

PPT

- **確率的モデル**
- **回帰分析における標準的仮定**
- **最小2乗推定量の確率的性質**
- **最小2乗推定量の分散の推定方法**
- **区間推定**

確率的モデル

• 単回帰モデル

$$Y_i = \alpha + \beta X_i + u_i$$

--- Y : 被説明変数、 X : 説明変数

u : 誤差項は確率変数

• なぜ誤差項が含まれるのか？

--- Y を家賃、 X を面積としたとき、他要因が存在する

--- これらをすべて足し合わせものを誤差項とする

• なぜ誤差項を確率変数とするのか？

--- 築年数、階数、駅からの距離など全て同じ条件でも
家賃は異なる

--- 人間は神のように全ての構造を知らない

回帰分析における 標準的仮定

標準的仮定

$$Y_i = \alpha + \beta X_i + u_i$$

仮定1: 説明変数 X_i は確率変数ではなく、固定した値を持つ

仮定2: n が大きくなると、 $\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$ は ∞ に近づく

仮定3: $E[u_i] = 0$

$$E[(u_i - E[u_i])^2]$$

仮定4: $V(u_i) = E[u_i^2] = \sigma^2$

$$E[(u_i - E[u_i])(u_j - E[u_j])]$$

仮定5: $Cov(u_i, u_j) = E[u_i u_j] = 0$

$$u_i \sim i. i. d. N(0, \sigma^2)$$

仮定6: u_i は正規分布に従う

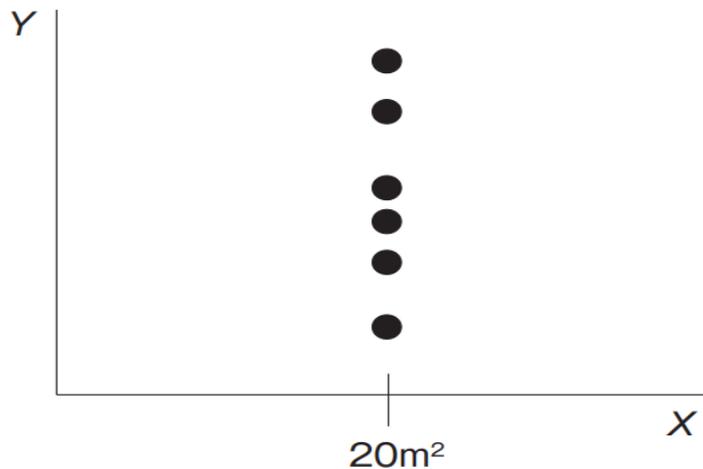
仮定2の意味

n が大きくなると、 $\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$ は ∞ に近づく

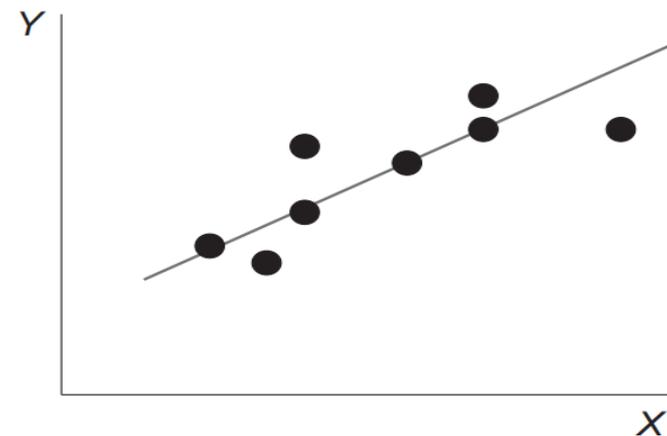
- ・2乗和であるため、 X に多少の変動があれば必ず満たされる
- ・ X に変動がまったくなければ、仮定は満たされない。

図 3 - 1 説明変数の変動と係数 β の推定との関係

(a) すべての X が 20m^2 の場合



(b) X にばらつきがある場合



X に変動がない限り、 X と Y の安定的な関係を測ることはできない

仮定3 ($E[u_i] = 0$) の意味

・ X 以外の要因を足し合わせたものが、なぜ期待値0なのか？

答え： 定数項 α は $E[u_i] = 0$ が満たされるように定義されているから

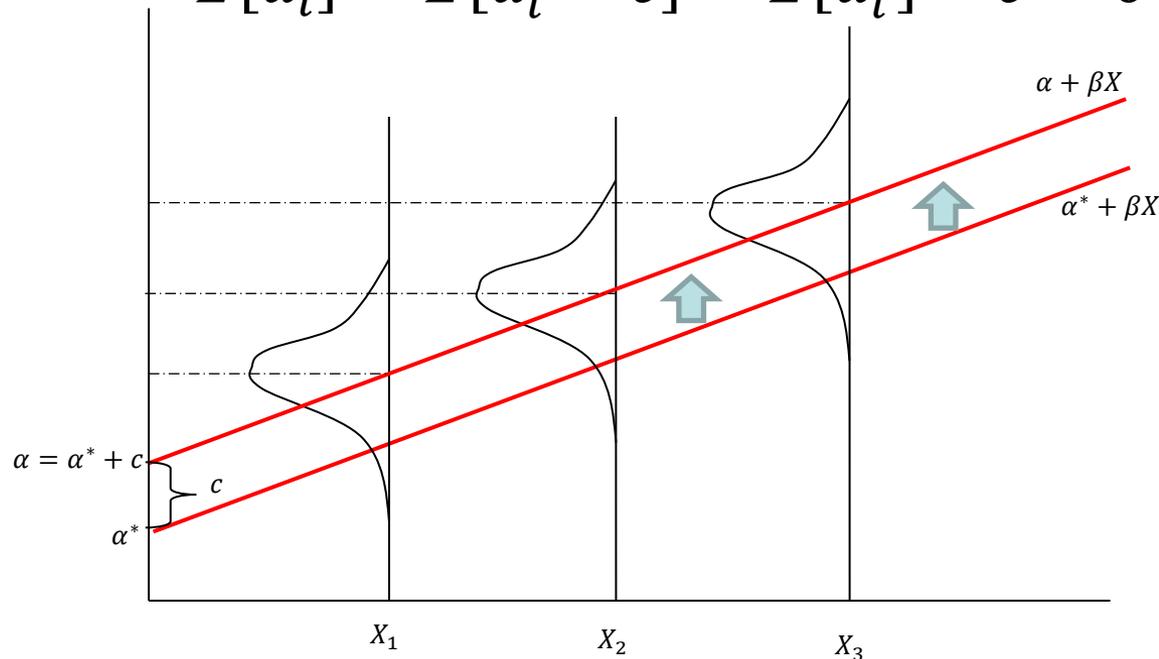
[証明] $Y_i = \alpha^* + \beta X_i + u_i^*$ ただし、 $E[u_i^*] = c \neq 0$

$$\Rightarrow Y_i = (\alpha^* + c) + \beta X_i + (u_i^* - c)$$

$$= \alpha + \beta X_i + u_i$$

ここで $\alpha = \alpha^* + c$ 、 $u_i = u_i^* - c$ と定義した。

$$E[u_i] = E[u_i^* - c] = E[u_i^*] - c = 0$$



仮定4の意味

$$V(u_i) = E[u_i^2] = \sigma^2 \text{ for any } i$$

- ・全ての*i*について*u_i*の分散は σ^2 で一定(均一分散)
 - 無作為抽出で選ばれたデータなら成立する
 - 通常、 $V(u_i) = \sigma_i^2$ となる(不均一分散)

仮定5の意味

$$\text{Cov}(u_i, u_j) = E[u_i u_j] = 0 \text{ for any } i \neq j$$

- ・無作為抽出した横断面データなら問題ない
 - 時系列データでは成立しない
 - 無作為抽出なら*i*番目と*j*番目のデータは無関係になる
 - 時系列データでは、 u_t と u_s は相関している(自己相関)

仮定6の意味

u_i は正規分布に従う

・ X 以外の要因を足し合わせたものが、なぜ正規分布に従うのか

---- X 以外の要因を $e_1, e_2, e_3, \dots, e_m$ と定義しよう

$$Y_i = \alpha + \beta X_i + (e_1 + e_2 + e_3 + \dots + e_m)$$

$$\Rightarrow u = e_1 + e_2 + e_3 + \dots + e_m$$

m が十分に大きいとき、**中心極限定理**によって
正規分布に従う

最小2乗推定量の確率的性質

最小2乗推定量の別表現

$$\hat{\alpha} = \bar{Y} - \hat{\beta}\bar{X}$$
$$\hat{\beta} = \frac{\sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})(X_i - \bar{X})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

⇒

$$\hat{\alpha} = \alpha - (\hat{\beta} - \beta)\bar{X} + \bar{u}$$
$$\hat{\beta} = \beta + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

--- 最小2乗推定量 $\hat{\alpha}$, $\hat{\beta}$ は確率変数 u の関数であり、それ自体も確率変数である

$\hat{\alpha}$ の別表現の導出

[証明]

$$\begin{aligned}\bar{Y} &= \frac{\sum_{i=1}^n Y_i}{n} \\ &= \frac{\sum_{i=1}^n (\alpha + \beta X_i + u_i)}{n} \\ &= \frac{n\alpha + \beta \sum_{i=1}^n X_i + \sum_{i=1}^n u_i}{n} \\ &= \alpha + \beta \bar{X} + \bar{u}\end{aligned}$$

次に、 $\bar{Y} = \alpha + \beta \bar{X} + \bar{u}$ を、 $\hat{\alpha}$ の公式に代入する

$$\begin{aligned}\hat{\alpha} &= \bar{Y} - \hat{\beta} \bar{X} \\ &= (\alpha + \beta \bar{X} + \bar{u}) - \hat{\beta} \bar{X} \\ &= \alpha - (\hat{\beta} - \beta) \bar{X} + \bar{u}\end{aligned}$$

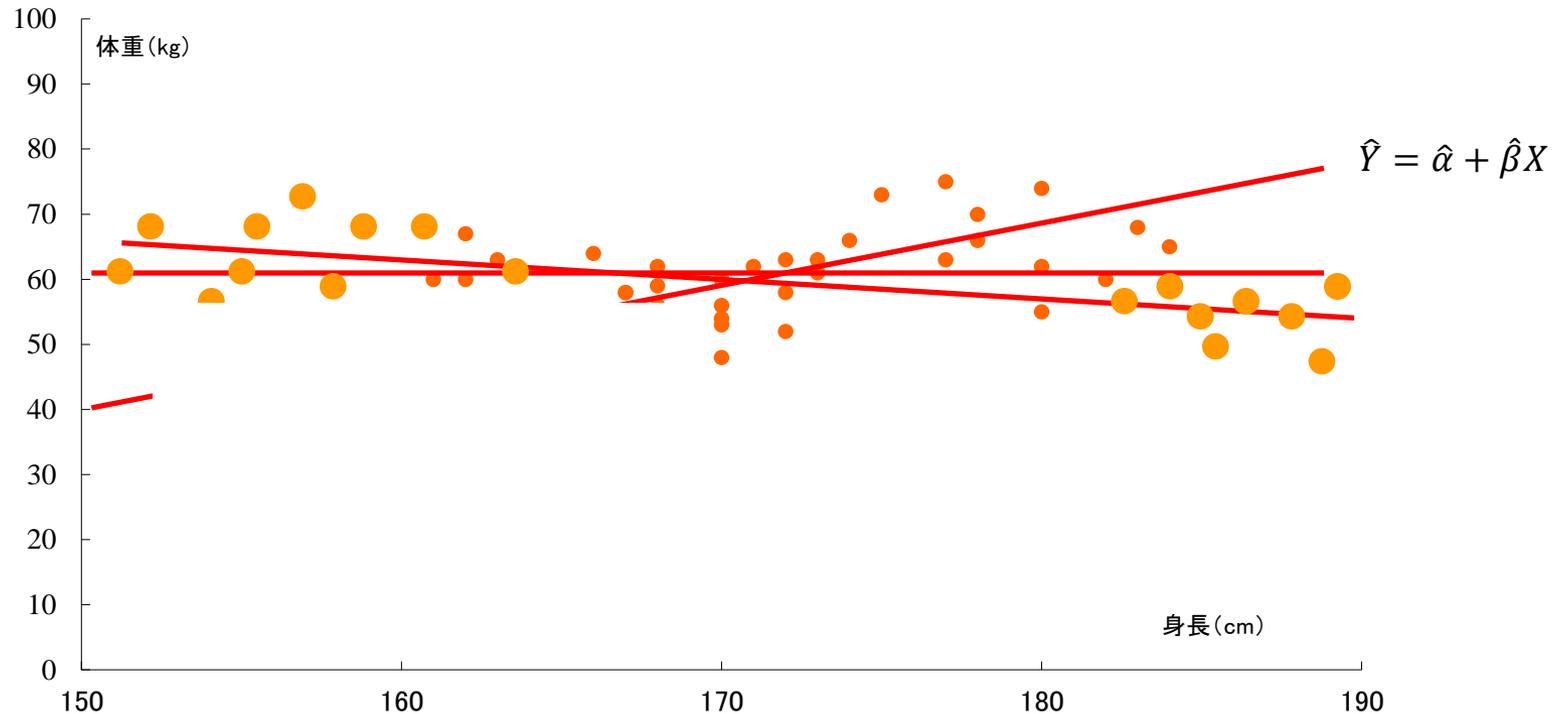
$\hat{\beta}$ の別表現の導出

[証明]

$$\begin{aligned}\hat{\beta} &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})(Y_i - \bar{Y})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})Y_i - \bar{Y} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})Y_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \quad \text{--- } Y_i = \alpha + \beta X_i + u_i \\ &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})(\alpha + \beta X_i + u_i)}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \quad \left. \begin{array}{l} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})(X_i - \bar{X}) = \\ \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})X_i - \bar{X} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \end{array} \right\} \\ &= \alpha \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} + \beta \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})X_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \beta + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}\end{aligned}$$

例) 身長と体重の関係

- Y を体重、 X を身長とする



- 得られたデータによって、最小2乗推定量の値が確率的に変動する

最小2乗推定量の期待値と分散

$$\hat{\alpha} = \alpha - (\hat{\beta} - \beta)\bar{X} + \bar{u}$$
$$\hat{\beta} = \beta + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

・期待値

$$E[\hat{\alpha}] = \alpha - (E[\hat{\beta}] - \beta)\bar{X} + E[\bar{u}] = \alpha$$

$$E[\hat{\beta}] = \beta + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) E[u_i]}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} = \beta$$

$$E[\bar{u}] = E\left[\frac{\sum_{i=1}^n u_i}{n}\right]$$
$$= \frac{\sum_{i=1}^n E[u_i]}{n} = 0$$

--- 最小2乗推定量は**不偏性**をもっている

・分散

$$V(\hat{\beta}) = \frac{\sigma^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

① σ^2 が小さいほど、最小2乗推定量の分散も小さい

② X のばらつきが大きいほど、最小2乗推定量の分散は小さい

③ n が増えると、最小2乗推定量の分散は0に収束する

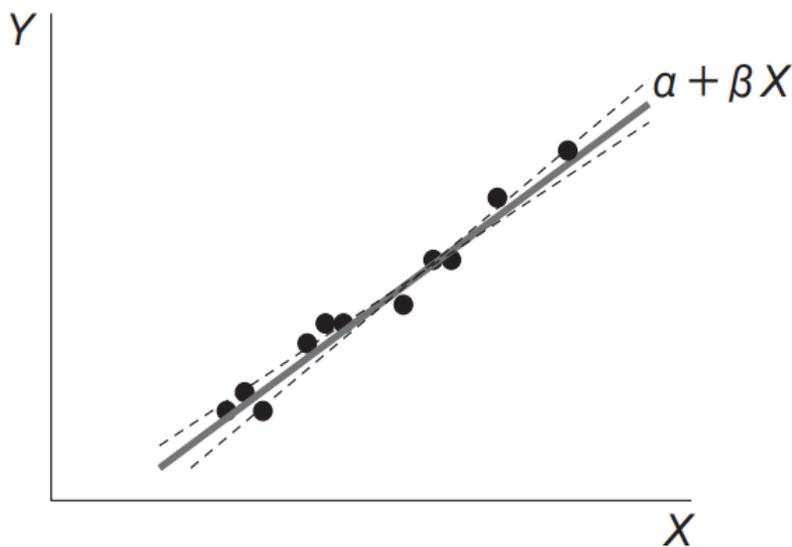
--- 最小2乗推定量は**一貫性**をもっている

分散の性質①

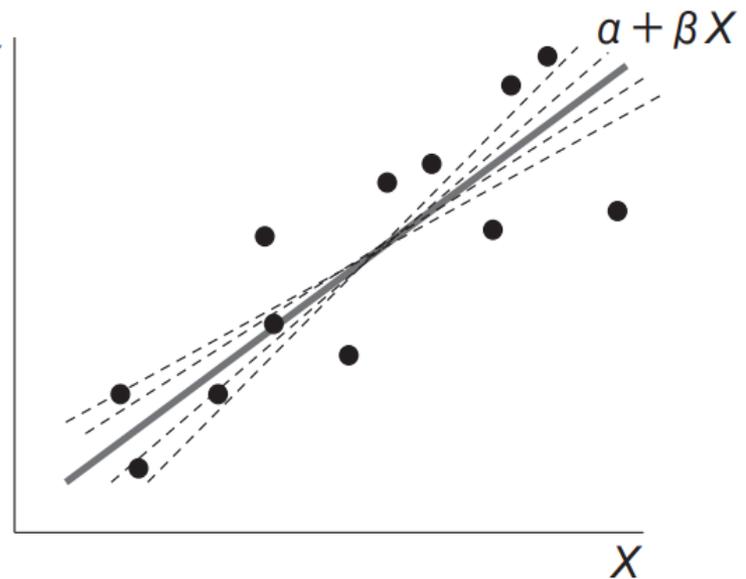
① σ^2 が小さいほど、最小2乗推定量の分散も小さい

図 3 - 3 誤差項の分散 σ^2 が OLS 推定量の分散に与える影響

(a) σ^2 が小さい場合



(b) σ^2 が大きい場合

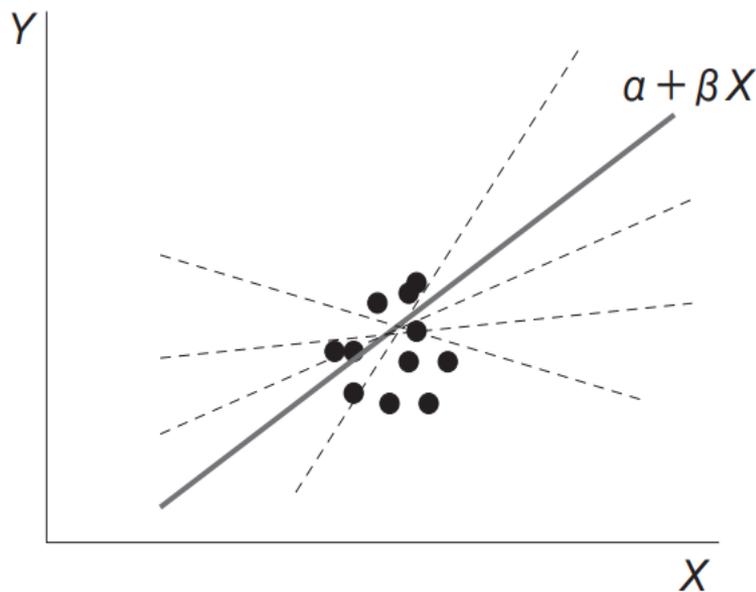


分散の性質②

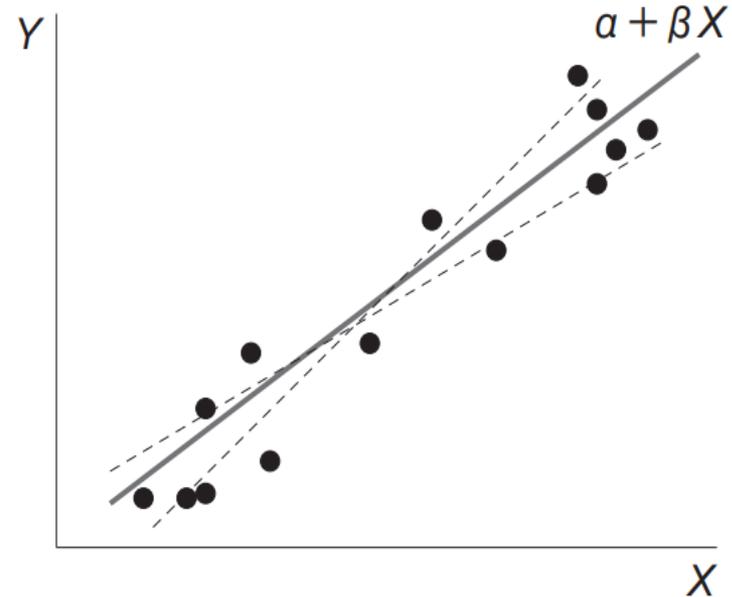
② X のばらつきが大きいほど、最小2乗推定量の分散は小さい

図 3 - 4 説明変数 X のばらつきが推定量の分散に与える影響

(a) X のばらつきが小さい場合



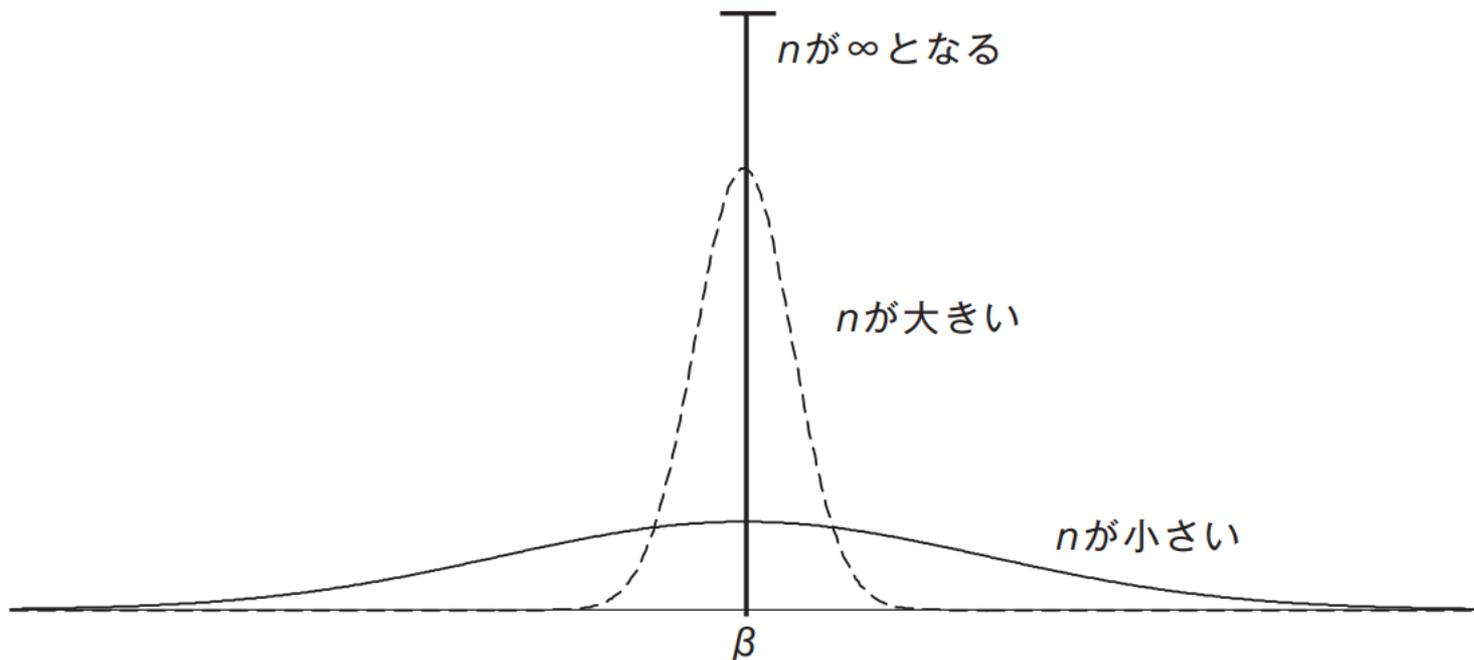
(b) X のばらつきが大きい場合



分散の性質③

③ n が増えると最小2乗推定量の分散は0に

図 3 - 5 サンプルサイズ n と OLS 推定量の分布の関係



--- 不偏性と分散が0になることから、最小2乗推定量は**一貫性**をもつ

$\hat{\beta}$ の分散 $V(\hat{\beta})$ の導出

$$\begin{aligned} E[(\hat{\beta} - \beta)^2] &= E \left[\left(\frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \right)^2 \right] \quad \boxed{\hat{\beta} = \beta + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}} \\ &= \frac{E[(\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i)^2]}{(\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2)^2} \\ &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2 E[u_i^2]}{(\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2)^2} \quad \boxed{E[u_i^2] = \sigma^2} \\ &= \frac{\sigma^2 \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}{(\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2)^2} = \frac{\sigma^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \end{aligned}$$

式展開では、以下に注意($n = 2$ の場合)

$$\begin{aligned} E[(\sum_{i=1}^2 (X_i - \bar{X}) u_i)^2] &= E \left[\left((X_1 - \bar{X}) u_1 + (X_2 - \bar{X}) u_2 \right)^2 \right] \\ &= (X_1 - \bar{X})^2 E[u_1^2] + (X_2 - \bar{X})^2 E[u_2^2] + 2(X_1 - \bar{X})(X_2 - \bar{X}) \underbrace{E[u_1 u_2]}_{=0} \\ &= \sum_{i=1}^2 (X_i - \bar{X})^2 E[u_i^2] \end{aligned}$$

最小2乗推定量の分布

$$E[\hat{\beta}] = \beta, \quad V(\hat{\beta}) = \frac{\sigma^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

- 最小2乗推定量は**正規確率変数の線形関数であるため、全体が正規分布に従う(正規分布の再生性)**

$$\begin{aligned}\hat{\beta} &= \beta + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \beta + \frac{(X_1 - \bar{X})u_1 + (X_2 - \bar{X})u_2 + \dots + (X_n - \bar{X})u_n}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \beta + \underbrace{\left(\frac{X_1 - \bar{X}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \right)}_{c_1} u_1 + \underbrace{\left(\frac{X_2 - \bar{X}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \right)}_{c_2} u_2 + \dots + \underbrace{\left(\frac{X_n - \bar{X}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \right)}_{c_n} u_n\end{aligned}$$

まとめると

$$\hat{\beta} \sim N(\beta, V(\hat{\beta}))$$

誤差項 u_i と残差 \hat{u}_i の違いとは何か

- モデルは $Y_i = \alpha + \beta X_i + u_i$ から、誤差項 u_i は

$$u_i = Y_i - (\alpha + \beta X_i)$$

- 誤差項 u_i は、実現値 Y_i と真の回帰式からの予測値 $\alpha + \beta X_i$ との差

- 残差 \hat{u}_i は、

$$\hat{u}_i = Y_i - (\hat{\alpha} + \hat{\beta} X_i)$$

- 残差 \hat{u}_i は、実現値 Y_i と推定された回帰式からの予測値 $\hat{\alpha} + \hat{\beta} X_i$ との差

- 残差 \hat{u}_i は誤差項 u_i の推定量

- 誤差項 u_i は観察できないが、残差 \hat{u}_i は観察できる²²

最小2乗推定量の分散の推定方法

$$V(\hat{\beta}) = \frac{\sigma^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

・ σ^2 の望ましい推定方法

$$\sigma^2 = E[(u_i - 0)^2] = E[u_i^2]$$

$$\Rightarrow \hat{\sigma}^2 = \frac{\sum_{i=1}^n u_i^2}{n}$$

・ 誤差項 u_i は観察できないため、残差 \hat{u}_i で代用する

$$s^2 = \frac{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}{n - 2}$$

・ 最小2乗推定量の分散の推定量

$$s_{\hat{\beta}}^2 = \frac{s^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

s^2 の性質

- $u_i \sim i. i. d. N(0, \sigma^2)$ 、よって $\frac{u_i}{\sigma} \sim i. i. d. N(0, 1)$

$$\Rightarrow \sum_{i=1}^n \left(\frac{u_i}{\sigma}\right)^2 \sim \chi^2(n) \quad \text{自由度(自由に動ける確率変数の数)は}n$$

- u_i は観察できないため、残差で置き換える

$$\sum_{i=1}^n \left(\frac{\hat{u}_i}{\sigma}\right)^2 \sim \chi^2(n-2) \quad \text{自由度は}n-2$$

--- 残差は n 個あるが、2つの式(正規方程式)を満たさなければいけない

① $\sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\alpha} - \hat{\beta}X_i) = \sum_{i=1}^n \hat{u}_i = 0$

② $\sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\alpha} - \hat{\beta}X_i)X_i = \sum_{i=1}^n X_i \hat{u}_i = 0$

--- 自由に動ける残差は $n-2$ 個しかない！！

たとえば、 \hat{u}_1 、 \hat{u}_2 、 \dots 、 \hat{u}_{n-3} 、 \hat{u}_{n-2} の残差がわかれば、

$$\textcircled{1} \quad \sum_{i=1}^n \hat{u}_i = 0$$

$$\textcircled{2} \quad \sum_{i=1}^n X_i \hat{u}_i = 0$$

①②の式を解くことで、 \hat{u}_{n-1} と \hat{u}_n が得られる。つまり、

自由度は $n - 2$

$$s^2 = \frac{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}{n-2} \text{ は不偏性を満たす}$$

[証明]

$$\begin{aligned} E[s^2] &= E \left[\frac{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}{n-2} \right] \\ &= E \left[\frac{\sigma^2}{n-2} \sum_{i=1}^n \left(\frac{\hat{u}_i}{\sigma} \right)^2 \right] \\ &= \frac{\sigma^2}{n-2} E \left[\sum_{i=1}^n \left(\frac{\hat{u}_i}{\sigma} \right)^2 \right] \\ &= \frac{\sigma^2}{n-2} (n-2) = \sigma^2 \end{aligned}$$

$\chi^2(n-2)$

最小2乗推定量の標準誤差

・標準誤差：推定量の標準偏差を推定したもの

$$s_{\hat{\beta}} = \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2} = \sqrt{\frac{s^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}}$$

例) 賃料 Y と面積 X の関係を分析する

① 2.2節の表2のデータ(8物件： $n_1 = 8$)

$$\hat{Y} = 2.62 + 0.163X$$

(1.05) (0.029)

② すべてのデータ(724物件： $n_2 = 724$)

$$\hat{Y} = 2.69 + 0.160X$$

(0.101) (0.003)

サンプルサイズが約100倍に増えたことで標準誤差は約1/10に減少した

区間推定

t統計量

- $\hat{\beta} \sim N(\beta, V(\hat{\beta}))$ を標準化すると

$$\Rightarrow \frac{\hat{\beta} - \beta}{\sqrt{V(\hat{\beta})}} = \frac{\hat{\beta} - \beta}{\sqrt{\frac{\sigma^2}{\sum (X_i - \bar{X})^2}}} \sim N(0, 1)$$

- $V(\hat{\beta}) = \frac{\sigma^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$ を $s_{\hat{\beta}}^2 = \frac{s^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$ で置き換えると

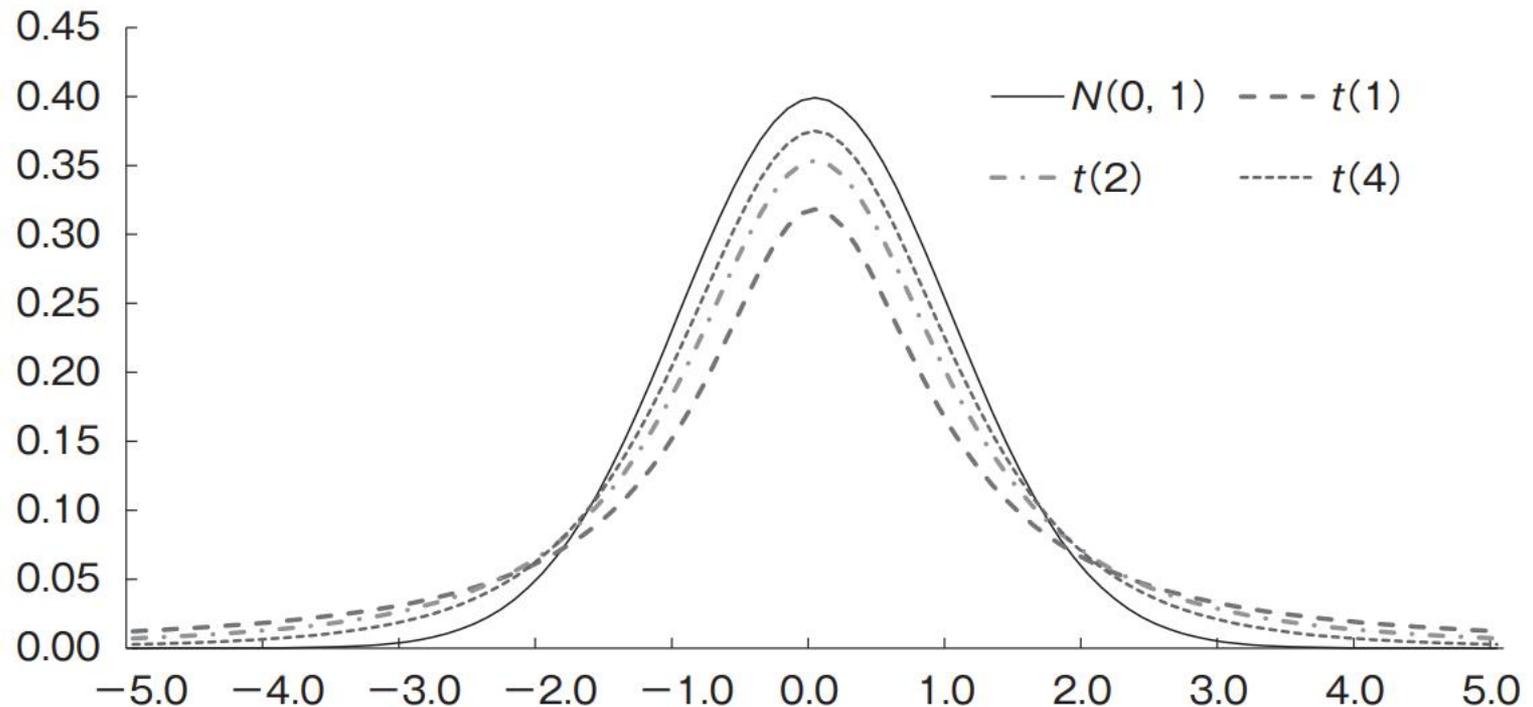
$$\Rightarrow t_{\hat{\beta}} = \frac{\hat{\beta} - \beta}{\sqrt{s_{\hat{\beta}}^2}} = \frac{\hat{\beta} - \beta}{\sqrt{\frac{\sum \hat{u}_i^2 / (n-2)}{\sum (X_i - \bar{X})^2}}}$$

$$= \frac{\hat{\beta} - \beta}{\sqrt{\frac{\sigma^2 / \sum (X_i - \bar{X})^2}{\frac{1}{n-2} \sum \left(\frac{\hat{u}_i}{\sigma}\right)^2}}} \sim t(n-2)$$

$N(0,1)$

$\chi^2(n-2)$

図 3 - 7 自由度と t 分布の形状



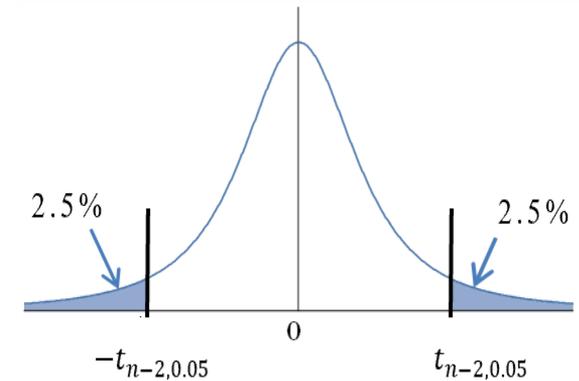
サンプルサイズが大きくなると、自由度 $n-2$ も大きくなり、 t 分布は標準正規分布に近づく(n が30以上なら両者はほとんどかわらない)

信頼区間

図 3-8 t 統計量の分布

$$t_{\hat{\beta}} = \frac{\hat{\beta} - \beta}{\sqrt{s_{\hat{\beta}}^2}} \sim t(n-2)$$

$$\Rightarrow 0.95 = P \left\{ -t_{n-2,0.05} < \frac{\hat{\beta} - \beta}{\sqrt{s_{\hat{\beta}}^2}} < t_{n-2,0.05} \right\}$$



$$= P \left\{ \hat{\beta} - t_{n-2,0.05} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2} < \beta < \hat{\beta} + t_{n-2,0.05} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2} \right\}$$

95%信頼区間

95%信頼区間 $\hat{\beta} - t_{n-2,0.05} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2} < \beta < \hat{\beta} + t_{n-2,0.05} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2}$

90%信頼区間 $\hat{\beta} - t_{n-2,0.1} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2} < \beta < \hat{\beta} + t_{n-2,0.1} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2}$

99%信頼区間 $\hat{\beta} - t_{n-2,0.01} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2} < \beta < \hat{\beta} + t_{n-2,0.01} \sqrt{s_{\hat{\beta}}^2}$

例) 同性愛者の割合

- ・ 米国州別データ($n = 50$)
- ・ X_i : 同性婚を支持する割合
- ・ Y_i : 同性愛を自己申告する割合
- ・ OLS推定すると、

$$\hat{Y}_i = 1.34 + 0.045X_i$$

(0.509) (0.011)

- ・ $t_{n-2,0.05} = t_{48,0.05} = 2.01$ を用いると、95%信頼区間は
$$\underbrace{0.045 - 2.01 \times 0.011}_{=0.023} < \beta < \underbrace{0.045 + 2.01 \times 0.011}_{=0.066}$$

---簡便法として、2.01の代わりに2を用いても、ほぼ同じ結果

$$\underbrace{0.045 - 2 \times 0.011}_{=0.023} < \beta < \underbrace{0.045 + 2 \times 0.011}_{=0.067}$$

まとめ

- **確率的モデル**
 - 誤差項の導入
- **回帰分析における標準的仮定**
- **最小2乗推定量の確率的性質**
 - 最小2乗推定量は不偏性と一致性を満たす
- **最小2乗推定量の標準誤差**
 - 最小2乗推定量のばらつきを表す指標
- **区間推定**

- ・ サンプルサイズを100倍すると標準誤差は1/10になる

$$S_{\hat{\beta}} = \sqrt{\frac{s^2}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}} = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2 / (n - 2)}{n \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2 / n}}$$

[証明] 標準誤差の構成要素のうち、

$$\frac{1}{n - 2} \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2, \quad \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$$

はサンプルサイズを増やしても値はあまりかわらない。よって、 $n_2 = 100n_1$ として、標準誤差の比をとると、

$$\frac{\sqrt{\frac{\sum_{i=1}^{n_2} \hat{u}_i^2 / (n_2 - 2)}{n_2 \sum_{i=1}^{n_2} (X_i - \bar{X})^2 / n_2}}{\sqrt{\frac{\sum_{i=1}^{n_1} \hat{u}_i^2 / (n_1 - 2)}{n_1 \sum_{i=1}^{n_1} (X_i - \bar{X})^2 / n_1}}} \approx \frac{\sqrt{\frac{1}{n_2}}}{\sqrt{\frac{1}{n_1}}} = \sqrt{\frac{n_1}{n_2}} = \sqrt{\frac{1}{100}} = \frac{1}{10}$$